

児童の安定感

—現代の教育に課せられた課題—



デール B・ハリス

発達と教育

私は発達心理学の問題に大変興味を持っている者です。発達心理学と申しますのはある一つの長い期間にわたる (long-reached time) 人の心理的構造 (psychological structure) と機能がどう変化するかということを問題にするわけですが、今日はこれから発達の各段階におけるいくつかの考えについてお話してみたいと思います。

ご存じのように構造といえますと、まず身体的なもの、それとならんで心理的なものがあるわけですが、その心理的構造の

中にはさらに知的な構造というものがあまして、これについてはピアジェなどが研究して来ております。またパーソナリティーの構造というものもあります。最初に児童心理学者はこの構造の変化というものに関心を持ちましたが、その構造がどう働くか、どう作用していくものかという機能についても関心を持ちました。

ところでこの機能というものは、長い人生の期間 (long life span) の中でも、または毎日毎日、毎週毎週という比較的短い期間の中でも変化するもので、この短い期間での変化をどうに学習といっています。そしてこの学習について心理学者は、はじめ大変興味を持ち、実験室の中で何回も何回も試行をくりかえして研究をしてきました。

一方このような長い期間の変化に関心を持つ発達心理学者は、これを科学として見、そこに存在しているある種の規則性 (regularity) というものに関心を持っています。この規則性の中には予測可能性 (predictability) というものが含まれるのです。これは、ある異なった種類のものの中に同様性 (similarity) を見いだすという操作であり、たとえば人はある一定の年齢に達するとだれでも歩くようになり、また本を読むようになつたりします。これがすなわちだれにも同じものがあるということなのです。

しかし、このような同様性 (similarity) を発見するのが重要であると同様に、差異 (difference) というものを見つかることもまた重要なことです。この差異というものは、それぞれの子どもが自分自身のやり方でやっていくことであり、それぞれの個人の特有なものを意味します。すなわちいいかえれば個人性とか個性というものでありまして、その人だけにあるところのものです。

ところで、同様性とか、規則性とかいうことをいいましたが、これはある一つの集団をとるとその中に同様性を発見することができるが、一方その中にはもちろん個人性 (individuality) もありますし、また他の集団と比較した場合にはその集団の中

に特有の同様性があるのです。このように、同様性というのは人類一般などというのでなく、集団ごとにあるものとして、その中に個人性があるのです。しかし集団と集団との間にある同様性については、それをわれわれは「文化の型」 (cultural pattern) と呼んでいます。

さて、このような文化の差異 (cultural difference) が、集団間の差異 (group difference) としてあると同時に、もう一つ性差というものがあることにも気づきます。男性的な (masculine) 性格、あるいは女性的な (feminine) 性格というものがそれぞれです。これらについては、発達心理学者が最も関心を持って研究していますが、社会心理学者や人類学者も関心を持っておりまして、発達的面から見ると、このような差異が、長い人間の発達過程の中でどう形成されてくるのかという問題になるわけです。

それではいったい、なぜ児童心理学者はこのような発達ということに関心を持つのでしょうか。それにはいろいろの理由があります。その一つはまず職業上からの必要ということでしょう。皆さんのうちの一人は児童心理学者になるかもしれませんし、あるいはカウンセラーになるかもしれません。またあるいはソーシャルワーカーやその他、子どもを助けるよう

な職業につくかもしれません。またある人たちは教師になられるかもしれませんが。そしてそれは実に大切な仕事でして、教えるということも他人を助ける仕事にちがいないのです。他人を助けるということ、特に発達し、変化し、成長しつつあるところの子どもたちを助けるためには、その長い人間の発達過程の中にどういふ同様性があるか、またどういふ差異があるかということを知っていなければなりません。

第二の理由は、大變個人的な (personal) ことですが、皆さんはそれぞれ私をも含めて、小さい子どもの時代を経験してきているわけですが、今やみなさんは青年時代、若き成熟の年代 (young maturity) にさしかかっており、さらにこれから中年に、そして老年に達するという道をたどるのです。そして皆さんの中のほとんどの人が子どもを持つようになると思います。このように私どもは皆それぞれ、ある発達の過程を経てここに至っており、さらにこれから変化しようとしているのです。すなわち、今までとは異なった自分というものになりたいと思うわけで、ここにもう一つの理由があるわけです。われわれは、発達しつつあるという点では皆同じですが、その中で、それぞれちがったものになりたいと思うし、今まで自分が得てきたものとはちがった自分を将来において形成したいと願っているの

です。

私は若い頃、講師として児童心理学を教えていたのですが、その時、通信講座を持っていました。たくさんの方がその通信講座を受けていたのですが、その中にかんりの人数の刑務所の囚人がいました。その人たちは必ずしもみんなが学問としての心理学に興味を持っていたのではなく、多くは自分自身のこと到大變興味を持っていました。どうして自分がこのような境遇に立ち至らねばならなかったのかという自分自身の問題に関心を持っていたのです。

第三の理由は、すこし哲学的なものでありますが、二つのことが考えられます。その一つは、皆それぞれ自分の生まれた国とか土地、文化というものに対して忠実でありたいと願うもので、たとえば私は自分の国が、もっと良くなることを望むし、また皆さんは日本の国がもっと良くなることを望むと思えます。ですから、児童の発達のことを知り、それを応用することが、われわれのこの国を、町を、文化を良くするのにどれくらい役に立つかは計り知れないものがあるわけです。

また一方それとは別に、われわれはもう一つの哲学的なことを考えます。それは児童の発達を研究するということが、実はひじょうに建設的な見方を築くことになるということです。世

界観とか人生観とかを考えると、長い期間にわたっての人間の発達というものを折り込んで見ようとすると、どうしてもわれわれは人生や世界について建設的な見方を導入せざるを得ません。

急激な社会変化と人間の教育

安定感の重要性

さて、今まで児童の発達を研究する背景となる問題をお話してきましたが、ここですこし話題を変えてみましょう。皆さんがいろいろと経験しながら育ってきたこの社会は、急激な変化 (rapid change) をしておりまして、皆さんは今もその中で自分自身が成長しているのだということを知らなければなりません。皆さんが小学校の時代から今まですごしてきたこの十〜十五年間というものは、われわれのおじいさんの、またそのおじいさんの時代から数百年かかって経てきたような変化をなしとげてきているのです。

皆さんだけでなく、私たち自身も、そのような急激な社会の

変化に遭遇し、中年の世代としていろいろの問題を感じるのがあります。このことは今では世界中の人にとって同じです。

そしてこの急激な社会変化は当然に不安 (anxiety) を底に持っています。不安というのは、これから先どうなるかわからないという事態であり、急激な社会変化の中では、われわれは将来を予測することができず、当然不安定な心配の多い状態ともなうのです。そしてこれは教育の水準が高く、知識があればある程その不安定感は大いなのです。しかし一方で、この不安そのものが希望というものに転じうる力を持っているということはまた不思議なことです。特に若い世代は、年とった世代より一層多くの希望を将来に対して持ち、この不安を乗り越える力を持っています。

若い人たちが国にとって大切であるということは、向上するということのためなのです。大学では向上するための知識や技術を与えますが、それは知識を持ち、技術を持っていれば向上するのに効果的だと考えられるからです。しかしこれから自分を変化させていくことができるような人間には、それに加えて内側からの力 (inner strength) としての安定感 (security) を持っていることが必要なのです。

この安定感 (security) の重要な一つの側面に、直面する

(cope)とすることがあります。これは新しい事態を自分自身で処理し、単に服従するのではなく、自分自身のものとして身につける (master) という意味で、とくに子どもの発達の側面の中でひじょうに注目されている能力なのです。

心理学者や精神病学者は現在まで、secure の反対の insecure (不安定な) ということについて多くの研究をしてみました。その中で不安定 (insecurity) の源として二つのことを一致して発見しています。

その一つは親の愛が欠けていること、第二は直面 (cope) する能力が欠けているということです。ではこの二つについてもうすこし説明いたしましょう。

第一の親の愛についてですが、ある種の親の愛はしばしば子どもの発達をむしろ妨げます。あまりにも子どもに対していっしょうけんめいになりすぎて、かえって子どもの将来を親の意志でしばってしまうのです。英語の洒落を一つお教えしましょう。mother (母親) の頭に s をつけると smother という言葉になります。smother という語は、息がでないように頭の上から毛布などをかぶせてしまうことを意味します。では正しい親の愛とはいったいどんなものでしょうか。それはすでにおわかりのように、子どもが独立していくことを助けることです。

すなわち、子どもが独立していくことを妨げているような要素をとりぞいて、自分の足で歩けるようにしてやることです。

そこで改めて誤った種類の親の愛がそそがれると、一体どういうことになるかが問題になるのですが、そのとき重要なものとしてとりあげられるのが self worth すなわち自分自身が何かに役立っている、また何かに値する存在であるという感情(あるいは、誇りと訳した方がわかりやすいかもしれません。訳者注) が失われるということです。

ところで心理学者や精神病学者が多くの研究を通して明らかにしていることは、この自己価値感 self worth を感ずることのできない子どもの問題の多くは、実は、(不安定感) が原因になっているということです。

ちょっと家族の中のことを考えてみましょう。ここでは子どもは、頭がいいからとか、よい性格だからとかによって親から愛されているのではなく、まさにその子どもが子どもであるから愛されているのです。すなわち、ここではなんらの条件もついていない、ひもつきでなく愛されているのです。その子どもが子どもであるということだけで価値があるならばその子どもは自己価値感 (self worth) を感ずることができるのです。

このことは世界中どこでも共通ですから、将来教師になる人や

親になる人がこのことをよく心得ておくことは、子どもの発達を考える上で実に重要であると思います。

さて、だんだん成長して責任が増していくと、新しい問題に直面してそれを乗り越えていく力 (ability to cope) が次に重要になってきます。心理学者や精神病学者は、不安定感の源を探っていくって、新しい問題に直面する能力のないことが一つの原因であることを発見しているのですが、それを解決するのは、いくつかの方法があるといっています。

その一つは、その人が今その問題を解決するのに必要としている知識や技能を与えてやるということです。ところが、必ずしもすべての人がこのような知識や技能を持つとはかぎりませんし、また持ったとしてもそれをその時集中して発揮できるとはかぎりません。まして精神薄弱者のことを考えると、彼らは知識や技能をみずから習熟していく力を持っていないのです。

そこで第二の解決法のがかりとなるのが、その人に場所を与えること、すなわち英語でいうと niche (隠れ家・適所——注 生態学で用いられる語) を与えるということです。カウンセラーはその人がいったいどのくらいのところを望んだらその人の能力にあっているかという、その人にとっての適切な場所を見つけることを助けるのを一つの働きとしています。また心

理学者はよく適応ということをいいますが、これはまさに知識や技能を教えるということと同時に、教えればできるという適切な場所を見つけてやることとの二つの間のバランスを意味しています。不安定を解決するのに必要な方法は、これら二つの間に調和を与えることだと私は考えています。

ここで、そのようなことについてくわしくお話をしようと思つと、それは実に長い長い心理学の講義をしなければならなくなるので、今日はその中でしばしば見のがし勝ちな問題を一つとりあげてみようと思います。

実際、若い母親や父親は自分の子どもを育てるとき、しばしば不安定感を育ててしまいがちなのですが、私は小さい子どもについて一つ例をあげて話をしようと思います。

皆さんの中で犬とか猫とかいうペットを飼ったことのある人がいらっしやるでしょう。その犬や猫は飼主の表情や気持をさうとう読みとります。彼らは飼主の機嫌が良いとか悪いとかを知ることができるのです。動物はもちろんことばを持っていないのですが、それにもかかわらずわれわれの表情や心を読みとるのです。おそらくひじょうに小さな犬がかりから読みとるのだと思われませんが、ことばを持たない人間の幼い子どもについてもこのことは同様であると思われまます。このような能力を社

会的知能といっていますが、それによって他人の発するいろいろな信号からその人の気持を読みとることができるのです。

そこでこのような社会的知能の高い人とその低い人をくらべてみますと、高い方の人は、小さい時から、他人との表情や姿からその人の感情や考えていることを読みとる力を発揮させていた人であり、逆に低い方の人は、小さい時にこれを読みとる力を発達させるのを忘れてしまった人だということができそうです。つまりそれは、幼い時あまりことばにたよりすぎたということかもしれません。

幼い子どもについて考えますと、彼らはもちろんことばを持っていませんから、他人の表情・姿・身振りなどから、その人の考えや感情を読みとる力を発達させているのにちがいはありません。さらに小さい子どもではそのような視覚だけでなく、味覚や臭覚にもたよっていると考えられます。このことからわれわれは、ことばや文字についての感覚とは別の感覚にうったえることも重要であるのだと気づきます。

皆さんに一つお聞きしたいのですが、ある臭がたちこめてきて、その臭をかいでいるとそれにもなって幼い時のいろいろな記憶が急に押しよせてくるようによみがえって来ることを経験したことはありませんか。

くりかえしの重要性

とにかくそのようなことからわれわれは視覚やそれ以外の原始的な感覚を通して得た経験というものは、子どもの発達にどうにかに大切かを認識しなければなりません。

さて、今まで私は感覚というものを強調してきましたが、もう一つ私が強調したいことがあります。それはくりかえしとか、リズムとことです。私は多くの宗教がこのくりかえしを強調していることを知っています。東洋の宗教もまた同様であると思います。すなわち宗教はある季節や月によって同じことがめぐってくるというリズムを強調するのですが、それは安定感を与えるのに一つの重要な要素になるのです。

情緒的に障害のある子どもについて、彼らの経験をきぐってみますと、そこには予測する能力がないとか、たよるべきものがないということがひじょうに多いことがわかるのです。すなわち情緒障害児の場合には、彼らがいったいいつ食事がもらえるのか、あるいはいつになったらねるのかということ組織化してくれる人がなかったという場合が多く見出されます。すなわち、親がまったく子どもに対して責任をはたしていないという場合がしばしば見られます。

そこで私は、古代の宗教がこの規則性ということを強調したことにひびょうに関心を持っているわけです。この予測可能性というものは、実に人の心の深いところにある欲求に合致しているものではないのでしょうか。そして、そのことはまた、幼い子どもについても同様に見られるわけです。さらにまたこのことは単に日常生活の問題だけではありません。幼い子どもは自分がどうしたらよいかわからないような問題にぶつかつたとき、すなわち、不安にぶつかつたとき、たよるべきものを持ち、よりかかれるものを持っているなら、安定感とか自己存在価値というものを十分に発達させていくことができるのです。

この点について私は、おとなが知っていてよい二つのことをお話ししようと思います。第一は、いろいろな感覚的経験であり、第二は人に対する信頼感であります。もしこれがなければその人は、いつかいろいろな問題をおこし、また刑務所にいかなければならないということにもつながるのです。

皆さんのように若い世代というものはいつも、不安な、そして確かさを持ってないという感情でいっぱいだとはいえましょう。しかしそれは実はあたりまえで、なぜかといえば、将来の世界がどうなるのか予測不可能で、とてもなんらの規則性を見つけてだせない状態だからです。心理学者はこういう問題に対して、

次のようなことを見いだしております。安定したおい立ちを持つ者は不安定な場面に遭遇したとき、より有効に力を發揮します。それに対し、不安定なおい立ちを持つ者は予測できないという感情を多く持ちやすいのです。大変幸いなことに皆さんは安定した少年少女の時代を経てここまで到達してきたのでありまして、もし今、皆さんがこれからの世界を不安と動揺とを持って見ているとしてもきつとこれに有効にぶつかつて処理していく (cope) 力を持っていると思うのです。

さて今までにはほぼ二つのことについて一応お話ししたと思います。一つは視覚とかその他の感覚をつかうことについて、また一つはくりかえしについてでありました。そこで私は、一つ、家族というものに例をとってお話ししてみたいと思います。それはおそらく皆さんの家族とも関係のあるものだと思います。といえますのは私はまだ日本の家庭のことをよく知りません。それで私は自分が知っている家庭の問題から例をとることにするわけですが、それでもきつと理解してもらうのにそんなに困難ではないと思います。直接的に親しい家族の経験というものはどこの国でもそんなにちがったものではありませんから。

さて家族の親密さの度合の強いことで世界中によく知られている例にユダヤ人の家族があります。ユダヤ人たちは自分たち

がユダヤ人であるという意識を強く持つております。そして、長い民族の歴史の中で多くの迫害を受け、世界中に散らばったにもかかわらず、彼らはユダヤ人であるという意識を依然強く持ち続けています。私は一人の心理学者としてユダヤ人たちがどうしてこんなに強い家族の結びつきを持つに至ったか大変興味を持ちました。彼らはひじょうに強い安定感を持つており、また一方では強い不安定感をも持つているのです。

彼らにはユダヤ人の家族として常に行なっている行事があり、これに強い感情的結びつきを持つています。たとえば彼らには家庭の中で守るべきお祭り（たとえば過越^{パスカ}の祭り）のようなものがあります。それは教会やお寺で行なわれるのではなく、家庭の中で行なわれるお祭りです。このお祭りのために母親たちはずいぶん前から準備をします。特別の香料を使って、特別の味付けをした食事を用意したり、強い臭をもったお酒を用意して幼い子どもも一口それをなめさせてもらえるのです。これは一つの強い感覚的経験となります。そして昔から語り継がれた詩を、儀式の時くりかえしくりかえし暗誦するのです。一番上の子どもは第一行を、二番目の子どもは第一行と第二行を、第三番目の子どもは第一、第二、第三行というようにです。今日のような電燈の時代になってもまだ彼らは特別のランプや

ろうそくを用いてこの儀式をやっているのです。

これらのことを心理学的に見ますと、第一に味覚と臭覚を強調していますし、また民族の歴史を物語った詩を幼い子どもから順に割り当てられたところを暗誦するというそうした割り当てられた場所を持つているのです。こうして子どもは感情的情緒的経験というものを持つわけです。これで私が強調したことがおわかりになるでしょう。ユダヤ人はその長い歴史の中で何度も迫害されながらも、しかし自分たちがユダヤ人であるという人種同一化の意識を発達させてきたのです。そのおかげで、たとえ世界中の人がユダヤ人のことを悪くいったとしても、儀式を守り民族の歴史を暗誦し、自分たちは存在価値のある民族だということを確認しながら生きています。

私はユダヤ人たちのこの例を、さき程から申し上げている直接感覚と、くりかえしということの重要性を知りたいへんよい例だと思つていつもお話しております。一年に一回だけぐつてくる儀式、そしてくりかえしくりかえし暗誦する詩の中に、自分たちの与えられた場所を持つている。このようなことの中でユダヤ人は自分たちがユダヤ人であるという意識を育てていくための根本的な経験をしているのです。そしてこれが心理学的に大変興味深いと申しますのは、こういうことこそが人の心

の中に残されるものであり、決して建物や場所に結びついてい
るものではなく、また人間に結びついているのでさえないとい
うことです。それは人の心の中に親から子どもへ、子どもから
そのまた子どもへと伝えられて、心の中に形成されて行くもの
なのです。

今、皆さんが住んでいる身のまわりの世界は、ひじょうに急激
に変化していますが、その中で私や皆さんがよく見慣れたもの
が無くなってしまったり変わってしまったりしています。その
ように変化する世界で私たちはどうやったら安定感を保つこと
ができるのでしょうか。またどうしたら私たちの得てきた伝統
的な感情や経験を後世に伝えていくことができるでしょうか。

これを考えた場合、私たちはこのユダヤ人の家庭の例から感
覚的经验とかくりかえしというものを温い家族の雰囲気の中で
経験することが重要であることを知らされるのです。そしてあ
らためて家族が行事を持つということ、たとえば誕生日を守る、
休日を守る、あるいは宗教的祭日を守るということがひじょう
に重要であるということにも気づくのです。

私が思いますには、日本には日本のひじょうに大切な文化と
か感情というものがあると思いますが、それをこの急激な変化
の中でどうやって残していくかということは、おそらく最も大

きな課題であると思います。日本は今急速に近代的工業国家に
なりつつあるし、またひじょうに人口移動が激しくなっ
て、生まれ育った土地にいつまでもいることが少なくなり、仕
事を持つときにはちがった土地に行ったりします。また家族が
次第に小さくなって親と子どもだけの世界になってきつつあり
ます。そういう時代の中であって日本の文化をになっている日
本人としての感情をどう育てるかということに、今日お話しした
ことは大いに関係があるかと思えます。

私が心理学者として確信していることは、一人一人が安定
感 (security) を持つて育っていくということ、そして皆さん
はあとわずかで親になる年齢ですが、この急激な社会の変化の
中であって安定感を子どもたちの中に育て、そして人間となる
能力、人間として新しい事態に対処できる能力を育てていくこ
とが、この現代に課せられた課題であるということです。

デール B・ハリス教授は、ペンシルヴァニア州立大学教授
であり、フルブライト交換教授としてお茶の水女子大学にお
いて児童発達の講義を担当しておられる。ここに掲げた論説
は、信州大学における講演の翻訳である。

津守 真訳・田中祐次記録